

過去との対話

私のアジ研図書館利用法

豊田 紳

私は、一九六〇年から二〇〇〇年のメキシコ政治を研究している。充実したメキシコ関連資料を所蔵しているアジ研図書館には、研究をはじめて以来、一〇年近く、ずっとお世話になってきた。例えば、日本ではアジ研図書館に唯一、メキシコの高級政治雑誌 PROCESO や新聞 Excelsior といった資料が所蔵されている。これらの資料は、当時の時代背景を知るうえでの基礎になるものであり、日本国内で参照できることは本当にありがたいことである。基礎的資料だけではない。アジ研図書館には、数十年前のメキシコ人政治学者や経済学者による研究書がコレクションされている。私にとつてのアジ研図書館の最大の魅力は、この古い本のコレクションにある。しかし、多くの人にとって、数十年も前の政治学の研究書を読む利点は、それほど自明でないかもしれないと思うので、アジ研所蔵の古い二次文献を読むことの意義について、少し書いてみたい。

今、「多くの人にとつて、数十年も前の政治学の研究書を読む利点は、それほど自明ではないかもしれない」と、まるで他人事のように書いた。しかし正直に言えば、これは私自身のことを指している。つまり、研究をはじめたばかりの頃の私は、昔の本を読むことの費用対効果を低いと決めつけて、あまり読まずにいたのである。理由は簡単で、昔の政治学の本は、問題

意識がわかりづらいが、使われるテクニクが単純だったからである。これに対し、研究者が激しくしごを削る昨今のメキシコ政治研究の本は、現代的でわかりやすいトピックを、最先端の方法で論証するものが多い。ここから、先端の新しい本を読む方が効率がよいと、浅はかにも考えていたのである。しかし、このやり方で進めるうちに、私の研究は停滞してしまつた。当時の私は、新しい本を読むばかりでは、自分の研究テーマをみつめることはできないという単純な事実を見落としていたのである。

アジ研図書館の蔵書を広く参照して、昔のメキシコ人学者の本を手当たり次第に読むようにしたのは、この頃だつたと思う。この方法は、我ながらずいぶんリスクの高いやり方だつたと思うが、運良く、研究の転機となる本に行き着くことができた。といっても、隠れた名著を見出したわけではない。何しろ、一九七九年出版のメキシコの農業政策に関する経済学書だつたのである (P. Lamartine Yates, *Campo Mexicano*)。この、古くて難解で高度な専門書が、にもかかわらず私の注意を引いたのは、普通の比較政治学者が考えないような「比較」を、この本が暗黙のうちに行っていたからである。メキシコには、一九三〇年代と六〇〜七〇年代ごろ脚光を浴びた「集合エヒード」という土地・農業制度がある。この本は、その集合エヒード

制を、ソ連のコルホーズだといって批判していたのである。そこで、以前読んだ左派農業政策学者の本に、メキシコの地方ボス「カシーケ」は、ソ連のクラーク(富農)だという批判があつたことを思い出した。

左右の政治的立場に関係なく、れっきとした学術書において、メキシコとソ連とが比較されている。ここには、もしかしたら何か構造的な類似があるのではないか。そう考えた私は、全く畑違いであつたが、一九二〇年代から三〇年代はじめのソ連を調べてみた(ここでもアジ研の蔵書にお世話になつた)。すると、メキシコとソ連の間には、確かに構造的な類似性があるように思えてきた。そこで、メキシコとソ連を比較するという、個人的には画期となる論文を書くことができたのである。私が昔の政治学や経済学の本を意識的に探して読むようになったのは、このような経緯からである。

たしかに昔の本の問題意識は理解しづらい。しかし、裏を返せば、その理解しづらさのなかからこそ、新しい研究アイデアが生まれる(かもしれない)。そして、私にとつてのアジ研図書館の魅力は、このような方法を可能にするだけのコレクションを有していることなのである。

(とよだ しん/早稲田大学政治経済学術院 助手)

